

スポーツの習い事を行う小学生の親の養育態度 —SDQ と対象関係に焦点を当てて—^{1),2)}

藤 後 悦 子*・井梅由美子*・大 橋 恵*

Parenting of Elementary School Students Participating in Sports — Focusing on Children's SDQ and Internal Relationship with Parents—

Etsuko TOGO*, Yumiko IUME* and Megumi M. OHASHI*

This study was designed to identify factors influencing parental attitudes towards children. An online survey was conducted with 1359 Japanese parents with elementary school children. We inquired about the psychological attributes of their child by using the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ), as well as object relations, the type of sports, the child's sports skill level, the team's sports level, and the child's sports skill level in the team, among others. The results indicated that parents' controlling parenting style increased and acceptance and child-centeredness were decreasing when children's problems increased. In the object relations of the parent factors, both parents' excessive need for identification and egoistic manipulation increased control and inconsistency, and superficiality in interpersonal relations decreased acceptance. The relationship between children's difficulties and parents' interpersonal relationships in the field of children's sports was more complicated in the case of high team level and in mothers. It is suggested that parents, coaches, and teammate's parents should be proactively informed that they should communicate with children according to their difficulties.

key words: parents of primary school child, parenting, Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ), interpersonal relation, sport

問題と目的

2019年のラグビーワールドカップ、2021年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会は日本で開催され、多くの人にとってスポーツを身近に感じるきっかけとなった。スポーツ選手は子ども達のロー

ルモデルとなっており(溝口・溝上, 2020)、スポーツができることは、子ども達の生活で一定のステータスとなる(鈴木, 2012)。クラレ(2021)が毎年小学生の親子約1000組に実施している調査では、なりた職業として男子ではここ数年スポーツ選手が1位となり、保護者が子どもに就かせたい職業でも、男

¹⁾ 本論文で、開示すべき利益相反関連事項はない。

²⁾ 本研究は JSPS 科研費の助成を受けた。また、本研究の一部は Asian Association of Social Psychology, International Congress of Psychology で発表された。

* 東京未来大学こども心理学部

Faculty of Child Psychology, Tokyo Future University, 34-12 Senjuakebono, Adachi, Tokyo, Japan 120-0023, Japan.
(togo.etsuko@tokyomirai.jp)

子の上位にスポーツ選手が挙がっている。スポーツの習い事は盛んであり、小学生の子どもを持つ保護者 6180 名を対象としたベネッセ教育研究開発センター(2009)の調査では、64.7%の子ども達がスポーツの習い事を行っていた。

親が子どもにスポーツを習わせたい理由は、バンダイ(2019)の調査によると、「体力づくり・運動能力向上のため」(17.3%)、「子どもの可能性を伸ばしたい」(15.7%)、「子どもの好きなこと・得意なことを増やしたい」(9.7%)であった。親は子どもの技術力向上のみを目指しているのではなく、生涯スポーツの視点からも子どもにスポーツと親しんでほしいと願っていると言えよう。

親子関係の問題

体力向上や楽しさ重視、可能性拡大への期待で開始したスポーツの習い事であるが、小学校高学年になると競技志向が高まり試合数が増加する。多くの親は試合の応援に行き、我が子の成績や活躍を気にする。スポーツは勉強とは異なり、子どもの様子を目の前で見ることができ、子どもの技術力や態度、試合の状況を事細かに把握しやすい。これはボランティア主体の地域スポーツであろうと民間のスポーツクラブであろうと同じである。特に小学生までは、ボランティア主体であれば親の当番や送迎が欠かせず、民間のスポーツクラブでも送迎等が欠かせない。ゆえに目の前で繰り返される子どもの不出来やふがない態度に親は葛藤を覚え、傷つく(大橋他, 2015)。そして、子どもに技術の向上や態度改善を求めて、過度に叱咤したり、過干渉になったりする(永井, 2007; Doyle, 2008)。

このような親の支配的態度的について、子ども達は嫌悪感を示している。約 300 名のバスケットボールを習っている子ども達へ「親にやってもらいたくないこと」を尋ねた結果、多くの子ども達が過干渉(36.8%)とネガティブな態度・言動(35.2%)を挙げた(藤後他, 2020)。一方、「やってもらいたくないこと」は「精神的サポート」(44.1%)が最も多く、子ども達は親に受容的な対応を求めている。

子どものスポーツにおける親の支配的態度的の問題は、日本国内のみではなく、欧米においても示されている(Doyle, 2008)。子どもを常に監視する親を指すヘリコプターペアレント(Vinson, 2013)という用語からも、過干渉が社会問題化されている状況が

浮かび上がる。親の支配的態度的の背景となる偏った価値観や子どもへの過剰な期待は、親子関係の弊害となり、行き過ぎると「教育虐待」につながる恐れがある(おおた, 2019)。特に日本人はスポーツに関して、「最後まであきらめない」という「気持ち主義」や「たくさん練習すること」をよしとする「一途主義」の問題が指摘されている(尾見, 2019)。

加えて島沢(2017)は、親の「成果主義」と「我が子主義」にも問題があるとした。チームの価値観が勝利至上主義的であると、下手な子に対する批判やハラメントが生じやすく、親もチームの価値観に同調して我が子に厳しく接したり、逆にハラメントから我が子を守ろうとしたりして、早く子どもを上達させようと練習に駆り立て、結果的に支配的態度的をとってしまう(藤後他, 2017a)。支配的態度的はスポーツの場のみならず、宿題や食事をせかすなど、常に時間に追われ我が子に指示を与え続ける状況を生みやすい。このようにスポーツにまつわる親子関係には留意する必要があるが、研究分野としてはまだ発展途上である。

親の養育態度と子どもの特性

親の行き過ぎた支配的態度的の問題は前述した通りであるが、親が支配的にならざるえない理由もあろう。Belsky(1984)は、親の養育態度は、子ども要因(以下、子要因とする)や親自身の要因から複合的に規定されているとした。例えば、子要因としては、出生順位、気質、知能、成績、発達的特徴等が関係するが、本研究では近年注目されている、教育的配慮が必要な子に焦点を当てる。

文部科学省(2012)の調査では、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒は6.5%いると報告された。ここでいう「発達障害の可能性のある児童生徒」とは、学習面や行動面でつまづきがある生徒を指す。小学校3年生から6年生までの地域スポーツに参加している子どもの母親 800 名を対象に行われた大橋他(2021)の調査によれば、我が子に対して「発達の遅れで気になることがある」と回答した割合が20.6%、「学校からの指摘を受けたことがある」が10.7%、「実際に専門機関を利用している」が4.2%となり、地域スポーツの現場にも教育的配慮が必要な子が多くいることが示された。

教育的配慮が必要な子が有する代表的な課題としては、仲間関係、指示の理解、記憶力、感覚過敏、コ

コミュニケーション、情報処理(聴覚刺激、視覚刺激)の偏り、衝動性や多動性等が挙げられる(内山他, 2018)。これらはスポーツ現場での指導者の指導や親としての対応においても課題となるであろう。発達障害児の母親を対象とした梶(2017)の調査では、育てにくさが母親の睡眠不足を促し、ストレスを助長していた。このことから、スポーツに関連した子どもへの対応の難しさがストレス要因となり、母親のストレスを助長し養育態度に影響を及ぼす可能性は高い。教育的配慮が必要である子どもは、子ども自身も困り感を感じており、困難さを有しているといえる。子ども自身の困難さを測定する方法は、Goodman(1997)により開発された子どもの強さと困難さアンケート(Strength and Difficulties Questionnaire; 以下、SDQとする)が世界各国で翻訳され、幼児期から青年期にかけてのスクリーニング式質問票として使用されている。これは子どもの適応について包括的に把握でき、日本版の妥当性も確認されている(Matsuishi et al., 2008)。厚生労働省のサイトでも軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアルの中で保護者や現場の職員が5分でチェックが可能な行動評定法として取り上げられている(厚生労働省, 2007)。SDQと養育態度の関連を検討した研究は数多くあり、例えば、SDQの困難さについての4つの下位尺度得点が高い子どもの母親は、そうでない子どもの母親よりも抑うつ傾向が高かった(西嶋他, 2015)。また、親向けの子育てプログラム実施後にフォローアップを行ったBloomfield & Kendall(2012)では、SDQの下位尺度の「行為」の問題が減少したことで、親の自己効力感が高まった。

親の養育態度と対象関係

子どもの困難さは親の養育態度を規定するが、一方で子どもの困難さには、親側の受け止め方も関係する。すなわち、親の対人関係についての認知が関連する。人は過去の積み重ねられた対人関係の経験により、対人関係に関する認知をそれぞれ有しており、これを対象関係と呼ぶ(Bellak et al., 1973)。例えば、「人は基本的には親切なものだ」という枠組みを持っている人と、「人に弱みを見せたら足元をすくわれる」と考えている人では、他者への関わり方が異なってくる。これを我が子やスポーツでかかわる人々との関係に当てはめてみる。例えば、親がもっと練習するようにと子どもに指示を出した際、子どもがそれ

に反発すると仮定する。この子どもの行動を「自分のことを信頼しているからわがままを言っている」と捉えるか「自分のことを嫌いで攻撃しようとしている」と捉えるかでは、その後の子どもへの接し方が異なってくる。また周囲の親や指導者との関係では、我が子が怒られている様子を見て、自分とは別人格である子ども自身の問題と捉えるか、まるで自分自身も怒られているように捉えるかでは、養育態度が異なってくる。このように親のもつ対人関係に関する認知が養育態度に影響することは自明であり、すでにこれまでの研究でも多く示されている(Safyer et al., 2019; Strand & Wahler, 1996)。

日本における対象関係の研究で主に使用される尺度は井梅他(2006)だが、これは青年期を対象としており、子育て期を対象とした使用には検討の余地がある。井梅他(2015)が成人期を対象に本尺度の信頼性を確認したところ、5つの下位尺度全てで α 係数が.83以上と安定性が認められた。また井梅(2017)の調査では、本尺度が母親の育児不安を予想しており、子育て期200名を対象とした三浦・北島(2017)の調査では、子育てでの援助要請が苦手な人は対象関係の「親和不全」、「対人希薄」、「見捨てられ不安」が高かった。これらの研究からも本尺度は成人期を対象として使用することが可能であると考えられる。

以上より、本研究の目的は、スポーツを習っている親子関係に焦点をあて、子要因としてSDQを用いた子どもの困難さと親要因として対象関係が親の養育態度に与える影響を明らかにする。なお、本研究では親の受け止め方を重視するため、SDQ尺度も子ども自身の回答ではなく、親版を用いることとする。

方 法

回答者

回答者は、子どもが地域スポーツを1年以上経験した小学1年生から中学3年生の保護者(父母)計1800名であった。子どもが2名以上いる場合は、最もスポーツに力を入れている者を一人抽出してもらった。ただし、中学校以上の部活動と比べ、小学生のスポーツの習い事には親の関与が欠かせないために、本研究では小学生の子どもを持つ親1359名を分析対象とした。また本研究の地域スポーツとは、ボランティア主体の地域スポーツのみでなく、民間のスポーツクラブも含むこととした。

調査手続き

本調査は、2018年2月に調査会社にモニターとして登録している者の中から研究テーマを説明し、匿名にて協力を募った。なお、オンライン調査はモニターが教示文や尺度項目に精通しないなど努力の最小限化が問題になっており、これらの検出が必要である(三浦, 2020)。そこで本研究では質問文を読んだか否かを確認できるトラップ質問(「この質問は左から2番目を選択してください」等)を途中に設け、不適切な選択をした者は事前に調査会社が取り除いた。

調査内容

デモグラフィック要因 親の性別と年齢、子どもの学年(以下、子学年とする)、子性別を尋ねた。

スポーツの種類 個人種目(水泳、テニス等)、集団種目(サッカー、野球、バスケ等)を尋ねた。なお、対面でプレーできるものは個人種目とした。

子どもの競技レベル・チームレベル 子どもの競技レベル(以下、子レベルとする)は、全国大会出場レベル(6点)、地方大会出場レベル、都道府県大会出場レベル、地区大会上位レベル、地区大会中位レベル、それ以下(1点)の6つの選択式から選ぶよう求めた。

チーム内の子どもレベル チーム内の子どものレベル(以下、チーム内子レベル)を以下の4つから選択肢式で選ぶよう求めた。チームには所属していない(0点)、補欠(1点)、準レギュラー(2点)、レギュラー/スタメン(3点)であった。

親の養育態度 親の養育態度を測定するために、幼児期から青年期後期までの幅広い発達段階の子どもの養育態度に関する尺度(加藤他, 2014)を取り上げた。本尺度は、受容的な態度である「受容・子ども中心」(10項目)、子どもにせがまるとダメと言えない等、一貫性のない養育態度である「一貫性のない優柔不断なしつけ(以下、非一貫性とする)」(7項目)、言いつけに従わせる「統制」(8項目)の3つの下位尺度から構成されている。各項目5件法で尋ねた。

子どもの困難さ 教育的配慮の視点から子どもの多側面における行動上の問題をスクリーニングするために開発されたSDQ(Goodman, 1997)を用いた。SDQは、5つの下位尺度、各5項目から構成されており、「行為」「多動」「情緒」「仲間関係」の4つの下位

尺度とこれらを合わせた総合的困難さが困難さを示すものであり、「向社会的」が強みを表す1つの下位尺度である。それぞれ子どもの支援に関して低ニーズ、中ニーズ、高ニーズに分けられる。各項目について、あてはまらない(0点)、まああてはまる(1点)、あてはまる(2点)の3段階で尋ねた。

対象関係 井梅他(2006)の尺度を用いた。本尺度は5つの下位尺度から構成されている。その内容は、自ら壁を作り、他者と深くつきあうことを恐れる傾向である「親和不全」、自分にとって身近な人との同一視の傾向である「一体性の過剰希求(以下、「一体希求」とする)」、自己中心的な心性が根底にあり、自分のために他者が動いてくれることを当然と考える傾向である「自己中心的な他者操作(以下、「自己中心」とする)」、親しい人から拒絶の怖れや相手の反応への過敏さである「見捨てられ不安」(以下、見捨てられ不安とする)」、身近な人との相互理解やサポートの授受等、信頼のおける交流が困難な傾向である「希薄な対人関係(以下、「希薄対人」とする)」から成る。各項目6件法で尋ねた。

なお分析には、HAD ver.16(清水, 2016)を用いた。

倫理的配慮

オンライン調査に回答する前に、回答は自由意思であること、匿名性が確保されていること、結果は公表されることを確認し、承諾した者が調査に協力した。本研究は第一著者の所属先の倫理委員会の承認(承認番号71)を得ている。なお本調査は倫理委員会承認番号を同じとする藤後他(2021)の1回目のデータセットを用いている。藤後他(2021)は、子どもの運動に対する養育尺度開発が目的であり、使用した変数は、1回目データとして子どもの運動に対する養育尺度、基準関連妥当性の子どもの養育態度(加藤他2014)、2回目データとして予測妥当性の場面想定法とその評価項目及び再検査用尺度であった。本研究では2回目データを一切使っておらず、藤後他(2021)とは仮説も目的も異なるため「応用心理学研究」投稿倫理規程第4条「二重投稿および分割投稿の禁止」には、当てはまらないと考える。

結 果

基礎統計量

本研究の対象者の内訳は、Table 1の通りである。

Table 1 基礎統計量

分類	項目
親性別	父親 673 名 (49.5%), 母親 686 名 (50.5%)
子性別	男子 678 名 (49.9%), 女子 681 名 (50.1%)
子学年	1 年生 131 名 (9.6%), 2 年生 150 名 (11.0%), 3 年生 178 名 (13.1%) 4 年生 331 名 (24.4%), 5 年生 309 名 (22.7%), 6 年生 260 名 (19.1%)
スポーツの種類	個人種目 681 名 (50.1%), 集団種目 678 名 (49.9%)
チームレベル	全国大会レベル 36 名 (2.7%), 県大会上位レベル 44 名 (3.2%), 県大会レベル 67 名 (4.9%), 地区大会上位レベル 182 名 (13.4%), それ以下 421 名 (31.0%), チームには所属していない 609 名 (44.8%)
子レベル	全国大会レベル 20 名 (1.5%), 県大会上位レベル 37 名 (2.7%), 県大会レベル 53 名 (3.9%), 地区大会上位レベル 170 名 (12.5%), それ以下 1079 名 (79.4%)
チーム内子レベル	レギュラー 359 名 (26.4%), 準レギュラー 238 名 (17.5%), 補欠 153 名 (11.3%), チームには所属していない 609 名 (44.8%)

平均年齢は、父親 44.55 歳 ($SD=5.52$), 母親 40.75 歳 ($SD=4.56$) であった。子どもが行っている集団種目の主なものは、サッカー(247 名, 18.2%), バスケットボール(169 名, 12.4%), 野球(147 名, 10.8%), バレーボール(92 名, 6.8%), 個人種目は、水泳(444 名, 32.7%), テニス (53 名, 3.9%), 剣道・柔道・空手(41 名, 3.0%), 陸上(20 名, 1.5%) であった。

尺度構成

親の養育態度に関する尺度は、先行研究通り、「受容・子ども中心」、「非一貫性」、「統制」の 3 因子を仮定し、確認的因子分析を行った。適合度指数は、 $GFI=.86$, $AGFI=.84$, $CFI=.85$, $RMSEA=.07$, $AIC=2518.31$ と十分に高かったため、先行研究同様の 3 因子モデルを採用した。各因子は、「受容・子ども中心」が $\alpha=.89$, 「非一貫性」が $\alpha=.84$, 「統制」が $\alpha=.87$ と高い信頼性が得られた。

対象関係尺度は、先行研究通り「親和不全」、「希薄対人」、「自己中心」、「一体希求」、「見捨不安」の 5 因子を仮定し、確認的因子分析を行った。適合度指数は、 $GFI=.85$, $AGFI=.82$, $CFI=.86$, $RMSEA=.08$, $AIC=3306.60$ であったため、先行研究同様の 5 因子モデルを採用した。信頼性は、「親和不全」が $\alpha=.82$, 「希薄対人」が $\alpha=.87$, 「自己中心」が $\alpha=.87$, 「一体希求」が $\alpha=.85$, 「見捨不安」が $\alpha=.83$ と十分に高かった。モデルの適合度を示す $RMSEA$ は、.05 以下であると当てはまりがよく、.10 以上であると当てはまりが悪くなくその間はグレーゾーンとされるため(小松, 2007), 両尺度ともに許容範囲であると考えた。

子要因の検討

SDQ は一般的にスクリーニングに利用されているため、回答は頻度が少ない方が多い形で分布の歪みが示された。そこで、厚生労働省が示した支援ニーズの分布点数に沿って、SDQ の得点を分類し (Table 2), 以降の分析では正規分布を前提としない分析を用いることとした。

本対象者の子どもの困難さを概観すると、「行為」、「多動」、「情緒」は厚生労働省サイトに記載されている Matsuishi et al.(2008) の支援分類の割合と同程度であったが、「仲間関係」の高ニーズ者の割合は Matsuishi et al.(2008) が 4.4% であったのに対して、本調査対象者では 12.6% と約 3 倍の多さであった。

SDQ では、これら 4 つの下位尺度を合計した総合的困難さを全体の傾向把握のために用いている。そこで、本研究でもこの総合的困難さを子どもの困難さの指標として用いることとした。はじめに子性別、父母別、スポーツ要因別の総合的困難さ得点の全体的特徴を把握するために、マンホイットニー検定を行った。その結果、子性別による有意差が示され ($U(1)=206299.00$, $p<.001$), 男子の方が、女子より総合的困難さの順位得点が高かった。また父母間にも有意差が示され ($U(1)=205043.00$, $p<.001$), 父親の方が、母親より順位得点が高かった。スポーツの種類 ($U(1)=45137.50$, $n.s.$), チームレベル ($U(4)=3.66$, $n.s.$), 子レベル ($U(4)=6.37$, $n.s.$) による差は有意でなく、チーム内子レベルでは ($U(2)=14.97$, $p<.001$), 補欠よりレギュラーの方が有意に順位得点が高かった。

Table 2 本研究と厚生労働省が紹介している日本におけるSDQ標準値 (Matsuishi et al., 2008 データ) の比較

		低ニーズ		中ニーズ		高ニーズ	
		件	(%)	件	(%)	件	(%)
行為	本調査	0-3点	1108 (81.5)	4点	135 (9.9)	5-10点	116 (8.5)
	Matsuishi et al. (2008)		(84.3)		(8.6)		(7.1)
多動	本調査	0-5点	1079 (79.4)	6点	111 (8.2)	7-10点	169 (12.4)
	Matsuishi et al. (2008)		(83.6)		(6.8)		(9.7)
情緒	本調査	0-3点	1075 (79.1)	4点	121 (8.9)	5-10点	163 (12.0)
	Matsuishi et al. (2008)		(84.3)		(7.2)		(8.5)
仲間関係	本調査	0-3点	1063 (78.2)	4点	125 (9.2)	5-10点	171 (12.6)
	Matsuishi et al. (2008)		(90.1)		(5.5)		(4.4)
向社会的行動	本調査	6-10点	709 (52.2)	5点	250 (18.4)	0-4点	400 (29.4)
	Matsuishi et al. (2008)		(71.2)		(15.5)		(13.3)
総合的困難さ	本調査	0-12点	993 (73.1)	13-15点	148 (10.9)	16-40点	218 (16.0)
	Matsuishi et al. (2008)		(80.6)		(9.9)		(9.5)

父母別の親の養育態度

親の養育態度は父親と母親で異なることから、父母別に親の養育態度について検討した。はじめに父母の養育態度の「受容・子ども中心」、「非一貫性」、「統制」の3つの得点間の違いを見るために、参加者内(養育態度の3つの下位尺度)×参加者間(父母)の二要因分散分析を実施した。その結果、交互作用効果が有意であり($F(2, 2714) = 2316.17, p < .001, \eta_p^2 = .63$)、「受容・子ども中心」は母親が父親より、「非一貫性」は父親が母親より有意に得点が高かった。また父母共に「受容・子ども中心」(父 $M = 3.78, SD = 0.58$; 母 $M = 3.89, SD = 0.58$)が最も得点が高く、続いて「統制」(父 $M = 2.73, SD = 0.71$; 母 $M = 2.80, SD = 0.73$)、「非一貫性」(父 $M = 2.27, SD = 0.69$; 母 $M = 2.02, SD = 0.62$)となった。

相関関係

次に、子要因の総合的困難さ、親要因の対象関係、スポーツ要因に対してスピアマンの順位相関を父母別に算出した(Table 3)。その結果、対象関係では母の「一体希求」と父の「見捨不安」以外の下位尺度で、「受容・子ども中心」へは負の相関($r_s = -.11 \sim -.41$)、「非一貫性」へは全ての下位尺度で正の相関($r_s = .17 \sim .40$)、「統制」へは父母の「希薄対人」以外で正の相関($r_s = .14 \sim .44$)が示された。総合的困難さには父母共に「受容・子ども中心」へは負の相関(父母 $r_s = -.30$)、「非一貫性」と「統制」には正の相関($r_s = .16 \sim .32$)が示された。

スポーツを習う子どもの親の養育態度の規定要因

競技レベルが高いチームほど、親は子どものスポーツに関与し、成果を意識する。そこで、チームに

所属している父母を対象にチームレベルによる養育態度の特徴を検討した。まずチームレベルを地区大会中位レベル以下と地区大会上位レベル以上に分け、さらに父母別に群分けを行った。説明変数として、子要因の総合的困難さ、親要因の対象関係、スポーツの要因のスポーツの種類、子レベル、チーム内子レベルを取り上げ、さらに子要因の総合的困難さに対する親の受け止め方を検討するために、総合的困難さを調整変数として投入し、ロバスト回帰分析を行った。

その結果、Table 4に示す通り、すべてのモデルは有意であり、VIFも5.0未満であった。子要因の総合的困難さは、父母共にチームレベルの高低に関わらず受容的態度を低めており、一方で、「統制」を高めていた。ただし、チームレベルが高い場合は、総合的困難さは父親の「統制」が高くなる要因とはなっていなかった。さらに、チームレベルが高い場合、総合的困難さは父親の「非一貫性」を強めていた。

次に、親要因である対象関係の側面から見ていくと、「一体希求」が強いほど父母ともに一貫性がなく、統制的な態度となっていた。また、母親は「自己中心」が強いほど統制的であり、父親はチームレベルが高い場合に、統制的であった。加えて、チームレベルが高い場合には、「一体希求」が強いほど母親は一貫性のない態度が強く、チームレベルが低い場合には父親の「受容・子ども中心」が低かった。さらに、「希薄対人」が強いほど、父母ともに「受容・子ども中心」が低く、チームレベルが低い場合は「非一貫性」が強かった。

続いて、親自身の年齢が高くて、かつチームレベル

Table 3 各変数の相関関係 (スピアマンの順位相関)

	養育態度			対象関係			デモグラフィック			スポーツ要因						
	受容・ 子ども 中心	非一貫 性	統制	SDQ	親和 不全	一体 希求	自己 中心	見捨 不安	希薄 対人	年齢	子 性別	子学年	スポ ツの 種類	チー ム内 子 レベ ル	チー ム レベ ル	子 レベ ル
養育態度	—	-.24**	-.18**	-.30**	-.16**	-.04	-.13*	-.14**	-.41**	.04	.04	-.09 ⁺	-.06	.02	.08	.07
子ども中心	—															
非一貫性	-.14**	—	.13*	.16**	.20**	.40**	.38**	.24**	.22**	.00	.06	.12*	-.01	-.03	.01	.04
統制	-.05	.21**	—	.28**	.20**	.36**	.34**	.26**	.08	.06	-.06	.04	-.01	-.04	-.02	-.06
SDQ	-.30**	.32**	.26**	—	.35**	.18**	.17**	.41**	.24**	-.11*	-.07	.00	.03	-.17**	-.12*	-.11*
親和不全	-.21**	.28**	.14**	.40**	—	.28**	.26**	.65**	.51**	-.12*	.05	.15**	-.02	-.06	.02	-.03
一体希求	-.11*	.40**	.44**	.26**	.31**	—	.61**	.45**	.05	-.03	.00	.12*	-.10 ⁺	.02	.08	.09 ⁺
自己中心	-.11*	.31**	.38**	.23**	.32**	.62**	—	.33**	.17**	-.05	.01	.05	.01	.01	.07	.13*
見捨不安	-.09 ⁺	.32**	.22**	.38**	.63**	.53**	.49**	—	.33**	-.09 ⁺	.03	.12*	.00	-.07	.05	-.01
希薄対人	-.36**	.17**	.00	.29**	.37**	-.01	-.02	.15**	—	-.03	.00	.07	.04	-.09	-.01	-.05
年齢	-.05	-.05	.00	-.19**	-.05	-.07	-.06	-.06	.01	—	-.01	.14**	-.06	.12*	-.06	-.03
性別	.05	.03	-.09 ⁺	-.13**	-.10*	-.06	-.04	-.06	-.12*	.04	—	-.03	.02	-.05	.03	.04
子学年	-.05	.06	.00	-.08	.00	.09 ⁺	.09 ⁺	.02	.05	.17**	.00	—	-.17**	.13*	.04	.10 ⁺
スポーツの種類の種類	-.08	-.01	-.14**	.01	-.06	-.06	-.05	-.04	.03	-.10*	.00	-.05	—	-.06	-.26**	-.18**
チーム内子レベル	.03	.02	.01	-.12*	-.13**	.03	.02	-.01	-.08	-.05	.03	.22**	.03	—	.10 ⁺	.26**
チームレベル	.08	.05	.14**	.02	-.10 ⁺	.08	.12*	-.02	-.11*	-.07	-.03	.04	-.16**	.25**	—	.78**
子レベル	.05	.11*	.13*	.01	-.11*	.10*	.13**	.00	-.12*	-.07	-.05	.11*	-.06	.36**	.81**	—

** p<.01, * p<.05, + p<.10
左下：父, 右上：母

Table 4 養育態度を目的変数とするロバスタ回帰分析

変数名	統制											
	受容・子ども中心				非一貫性				統制			
	父 (n=396)		母 (n=354)		父 (n=396)		母 (n=354)		父 (n=396)		母 (n=354)	
	地区上位 以上	地区中位 以下										
	(n=212)	(n=184)	(n=209)	(n=145)	(n=212)	(n=184)	(n=209)	(n=145)	(n=212)	(n=184)	(n=209)	(n=145)
総合的困難さ	-.28**	-.31**	-.27**	-.32**	.10	.32**	.09	.07	.28**	.06	.23**	.25*
親和不全	-.07	-.20*	.16+	-.02	.13	.01	-.03	-.02	-.12	-.04	.12	-.08
一体希求	-.07	-.12	.05	.04	.43**	.22*	.41**	.18+	.36**	.20*	.16+	.27*
自己中心	-.20*	.06	-.11	-.08	-.04	.05	-.05	.34**	.11	.39**	.21*	.20*
見捨不安	.12	.25**	-.09	.20	-.04	.09	-.09	.08	-.01	-.06	-.02	.10
希薄対人	-.07	-.38**	-.38**	-.37**	.22**	.07	.24**	.07	-.02	.08	-.10	-.01
年齢	-.16*	-.01	-.01	-.09	.06	-.01	.01	.04	.04	.01	.07	.18*
子性別	-.08	.01	-.03	.05	.06	.15*	.10	.00	-.04	-.08	-.09	-.02
子学年	.01	.05	-.10	-.08	-.04	.09	.13*	.03	-.07	-.03	.04	-.07
子レベル	-.03	-.02	-.07	.06	-.08	.15*	.16*	.12	-.06	-.03	-.08	-.10
チーム内子レベル	-.07	-.06	-.11+	.00	-.03	-.01	-.03	-.06	-.02	.04	.00	.00
スポーツの種類	-.07	-.10	-.03	.00	.02	-.01	.07	-.07	-.11+	-.12+	.00	.00
総合的困難さ*親和不全	.13	.19	.02	-.16	.00	.17	-.04	.04	.15	.28*	-.09	-.29+
総合的困難さ*一体希求	-.10	.05	-.09	.59**	.16	.02	-.05	-.11	-.08	.01	-.06	.02
総合的困難さ*自己中心	-.01	.01	.05	-.31**	.08	-.12	.04	.29**	.06	-.07	.04	-.14
総合的困難さ*見捨不安	.17	-.09	.12	-.06	-.10	-.01	-.01	-.06	-.17	-.17	-.03	.24
総合的困難さ*希薄対人	-.01	-.24**	-.18*	.04	.02	-.04	.01	.01	-.06	-.11	.06	-.07
R ²	.24**	.40**	.31**	.27**	.31**	.42**	.25**	.40**	.30**	.38**	.25**	.32**

**p<.01, *p<.05, +p<.10

が低い場合には父親の「受容・子ども中心」が低く、チームレベルが高い場合には母親の「統制」が高かった。さらに、チームレベルが高い場合に父親は女子に対してより「非一貫性」が高く、母親はチームレベルが低い場合に、子どもの年齢が高くなるほど「非一貫性」が強かった。チームレベルが高い場合、子レベルが高いほど父親は「非一貫性」が強く、チームレベルが低い場合に母親は「非一貫性」が強かった。

最後に、親要因と子要因の交互作用について検討する。有意であった交互作用項の回帰式に、総合的困難さのセンタリング基準を $\pm 1SD$ に変更して重回帰を行い、それぞれ単純傾斜の検定を行った。その結果、総合的困難さと対象関係の交互作用効果は6つの箇所を示された。単純傾斜が有意なものを以下に示す。母親では、チームレベルが低いとき、総合的困難さが高い場合 ($b = -0.32, SE = 0.06, p < .01$) も低い場合 ($b = -0.13, SE = 0.06, p < .05$) も対象関係の「希薄対人」が強いほど「受容・子ども中心」は弱かったが、その差は総合的困難さが高い方が大きかった。

また、母親で子どものチームレベルが高いとき、総合的困難さが高い場合では、「自己中心」が強いほど、「非一貫性」が強く ($b = 0.40, SE = 0.09, p < .01$)、「受容・子ども中心」が弱く ($b = -0.21, SE = 0.09, p < .05$)、「一体希求」が強いほど「受容・子ども中心」が強かった ($b = 0.31, SE = 0.10, p < .01$)。一方、子どものチームレベルが高く、かつ総合的困難さの低い場合は、「一体希求」が強いほど母親の「受容・子ども中心」が弱かった ($b = -0.25, SE = 0.11, p < .05$)。

父親では、チームレベルが高い場合、総合的困難さが高い場合では、「希薄対人」が強いほど「受容・子ども中心」が弱く ($b = -0.43, SE = 0.07, p < .01$)、総合的困難さが低い条件では、「親和不全」が強いほど、「統制」が弱かった ($b = -0.25, SE = 0.12, p < .05$)。

考 察

本研究は、親の関与が求められる小学生のスポーツの場を取り上げ、子どもの困難さと親の対象関係が養育態度に与える影響を検討した。

親が認知する子どもの困難さ

子要因として親の認知する子どもの困難さを取り上げたところ、小学生でスポーツを習っている子ども達の特徴は、「行為」、「多動」の分布に関しては Matsuishi et al. (2008) の調査結果とほぼ同じであっ

た。しかし、「情動」、「仲間関係」は高ニーズ者が多く、特に「仲間関係」は、Matsuishi et al. (2008) の約3倍となった。通常小学校高学年になると、子ども同士で遊ぶことが多くなり、親は子どもの仲間関係を目の当たりにすることが少なくなるが、スポーツの習い事は送迎や練習の当番、さらに試合の応援などを通して、子どもの仲間関係を間近で見ることが多い(藤後他, 2018)。ゆえに、我が子の仲間関係について敏感になってしまうのだろう。また、母親より父親の方が総合的困難さをより強く感じていた。これは、男性の方が子どもと接する時間が少ないために対応方法がわかっておらず困難を感じやすいためと考えられる。

スポーツの習い事をする小学生の親の養育態度

親の養育態度を概観すると、父母共に子どもに寄り添う姿勢を見せていたが、「受容・子ども中心」の姿勢を弱めていたのが、子どもの総合的困難さや対象関係の「希薄対人」であった。はじめに子要因を見ていく。総合的困難さは親の受容的態度を弱め、統制的な態度を強める要因になっていた。子どもの総合的困難さが高いと、親の指示が通りにくいいため受容的に対応できず、力で抑えようとする統制的な態度が強まるのであろう。さらにチームレベル別での特徴を見ると、総合的困難さは、チームレベルに関係なく母親の受容的態度を弱め、統制的な態度を強めていた。一方で、父親はチームレベルが高い場合に「非一貫性」を強め、チームレベルが低い場合に統制的な態度になるなど、チームレベルによる変動が見られた。発達に課題がある子どもの親はストレスが高い傾向にあり(大橋他, 2018)、地域スポーツの主な担い手である母親はチームレベルに関係なくストレスを感じている可能性が示された。

次に、親要因である対象関係と養育態度の関係を見ると、総じて、「一体希求」や「自己中心」が強いほど一貫性がなく、統制的な態度となり、「希薄対人」が強いほど、受容的でなく、一貫性のない養育態度となっていた。「一体希求」は、自分に身近な人が自分と同じ考えをもって当然と考える傾向を測定しており、「自己中心」は自己中心的に相手を操作的に扱う傾向を測定している。すなわち、対象関係のこれらの側面は、子育てにおいても子どもは自分の分身と考え、自分の考えの通りに子どもを動かそうとする傾向を示している。こうした傾向は、子どもに対し

て統制的に振る舞うことにつながり、なおかつ、一貫性のある養育態度にはなりにくいと考える。特にチームレベルが高いと、父母ともに「一体希求」と「自己中心」が「統制」を強めていた。我が子の活躍は自己評価を高めることと連動するため（藤後他, 2017a）、親の自己評価が下がらないように、子どもを操作してしまう傾向が示された。

さらに、「希薄対人」の高さは、他者への基本的な信頼感を持っていないことを示しており、他者への信頼感の薄さは自身に対する自信のなさの表れともいえる。こうした自他への信頼感のなさが、子どもへの受容的な態度を低め、一貫した養育態度が取れない要因になっていると考えられる。この傾向は母親ではチームレベルに関わらず示され、父親ではチームレベルが上位のときに顕著となった。

続いて、子要因と親要因の交互作用を検討した結果をみていく。交互作用が有意であった6つの内、チームレベル別では5つがチームレベルの高い群であり、父母別では4つが母親において示された。つまり、子どものスポーツの現場では、子どもの総合的困難さと親の対人関係のあり方の関係は、チームレベルが高い場合や、母親において複雑になる。

特に母親では、困難さがある子どもをレベルの高いチームに入れた場合、自分本位に他者を動かそうとする心性が高い人ほど、子どもを思い通りにすることが困難であるため、受容的でなく一貫性のない子育てになる。これは、「自己中心」の定義から考えると納得のいく結果であるが、今回チームレベルの高さと子どもの困難さが重ならなければこのような現象は起こらなかった点は興味深い。井梅他(2021)は、所属チームの技術レベルによる特徴を明らかにしており、チームレベルが高いチームでは指導者によるハラスメントが多く、勝利至上主義的であり、応援席ハラスメントと仲間ハラスメントが多かった。ゆえにチームレベルが高いほど、失敗や集団規律を乱す子どもの行為に対し批判的な雰囲気になりやすいことが想像される。教育的配慮が必要な子どもは指導者や応援席、そして仲間からのハラスメントのターゲットになりやすい。ゆえに、親はネガティブな感情を抱きやすく（藤後他, 2018）、過度なストレスがかかり子どもへの寛容度が下がるのであろう。また、チームレベルが低い場合、対人的な不安定さがある母親は受容的な態度が低くなるが、子どもに困難さ

があるときの方がその度合いが強い。子どもに手がかかるほど母親の不安定さが刺激され、受容的にはなれないのであろう。

さて、最後に父親の特徴である。父親では、チームレベルが高い場合のみ交互作用が示されており、子どもの困難さが高い場合、父親が対人的に不安定なほど受容的な態度が低くなり、子どもの困難さが低い場合、父親が回避的であるほど子どもをコントロールしない傾向があった。子どものスポーツにおいて練習の当番などは母親が担うことが多いが、チームが強くなると練習試合などが増え、チームの子どもを送迎したり応援に向いたりする父親も増えてくる。その際、人間関係が狭い人ほど、困難を抱えた自分の子どもの状況を他人と分かち合うことなどが難しく、受容的な態度を行うことが難しくなったと考える。また子どもの困難さが低く、かつ父親が回避的であるほど、他者と交わる機会が少ないため他者の評価を気にする必要がなく、子どもをコントロールしなくてすむのであろう。

以上のように、スポーツの現場、特に強豪チームでは、子どもの困難さと親の特性が相互に関連し、養育態度に影響を及ぼしていることが確認できた。ただし、本研究では、チームレベルが高く、子どもの総合的困難が高い状況では、母親の「一体希求」が強まるほど子どもへの受容的な態度が強まるという結果が一部例外的に示されたが、この解釈は難しく今後の検討課題となった。

本研究の課題と展望

本研究の限界は3つ挙げられる。1点目は使用した尺度の問題である。SDQは本人自記式のものと同親や教師が評定するものがあり、今回は親版のものを用いて実施した。そのため本結果はあくまでも親の主観的な認知であり、子どもの困難さを客観的に測定できているわけではないという課題が残る。

2点目は、限定的な対象者だったという点である。今回の対象者はオンライン調査会社のモニターに登録しているという意味で限定的であった。さらに父母の違いを検討するにあたって、ペアデータではなく独立データを使用した。今後は実際のチームへの依頼も含めて幅広いデータが求められる。

3点目は、因果関係の方向性である。本研究では子どもの困難さが養育態度に影響を与えるという方向で議論したが、逆に養育態度が子どもの困難さを増

長する可能性も否定できず、逆方向の因果関係の検討も必要であろう。

最後に本研究の結果の活用方法であるが、スポーツ現場は、チームレベルが上がるほど、親子ともにストレスを抱える傾向にある。子どもの特性を踏まえた対応方法を、親のみでなく指導者や他の保護者にも啓発し、よりよいスポーツ環境が構築されることを期待したい。

引用文献

バンダイ (2019). 「子どもの習い事に関する意識調査」の結果 Retrieved from <https://www.bandai.co.jp/kodomom/pdf/question252.pdf> (2022年9月30日)

Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. (1973). *Ego functions in Schizophrenics, Neurotics and Normals*. Wiley.

Belsky J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55(1), 83-96. <https://doi.org/10.2307/1129836>

ベネッセ教育研究開発センター(2009). 第1回学校外教育活動に関する調査報告書 Retrieved from http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikuhi/webreport/report06_05.html#zu6_7 (2022年9月30日)

Bloomfield, L. & Kendall, S. (2012). Parenting self-efficacy, parenting stress and child behavior before and after a parenting programme. *Primary Health Care Research & Development*, 13(4), 364-372. doi: 10.1017/S1463423612000060.

Doyle, D. (2008). *The encyclopedia of sports parenting: Everything you need to guide your young athlete*. Skyhorse Publishing.

Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586. <https://doi.org/10.1111/j.1469-7610.1997.tb01545.x>

井梅 由美子(2017). 母親の育児不安に関連する要因の検討——母親の被養育経験, 対象関係, 子どもの属性, 現在の状況等に注目して—— 日本心理臨床学会発表論文集, 369.

井梅 由美子・平井 洋子・青木 紀久代・馬場 禮子(2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 181-193. <https://doi.org/10.2132/personality.14.181>

井梅 由美子・大橋 恵・藤後 悦子 (2021). 子どもが所属する地域スポーツクラブに対する子ども及び母親の参加満足度に影響する要因の検討——所属チームの競技レベル・風土・スポーツ種目等に注目して—— こども環境学研究, 17 (3), 71-77.

井梅 由美子・藤後 悦子・大橋 恵 (2015). 成人期における対象関係と発達の変化——青年期との比較から—— 東京未来大学研究紀要, 8, 1-11. https://doi.org/10.24603/tfu.8.0_1

梶 正義(2017). 発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題と母親の子育て困難感——発達障害児と定型発達児の比較—— 関西国際大学研究紀要, 18, 1-7.

加藤 道代・黒澤 泰・神谷 哲司 (2014). 幼児期から青年期の子どもをもつ親の養育態度の検討 小児保健研究, 73, 672-679.

小松 誠 (2007). 旅の始まり 豊田秀樹 (編) 共分散構造分析 (pp.1-23) 東京図書

厚生労働省 (2007). 軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/> (2022年9月30日)

クラレ (2021). 小学6年生の「将来就きたい職業」, 親の「将来就かせたい職業」 Retrieved from https://www.kuraray.co.jp/enquete/2021_s6 (2022年9月30日)

Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, M., Yamashita, Y.,...Kakuma, T. (2008). Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain & Development*, 30, 410-415. <https://doi.org/10.1016/j.braindev.2007.12.003>

三浦 麻子 (2020). 心理学研究法としてのウェブ調査基礎 心理学研究, 39 (1), 123-131. <https://doi.org/10.14947/psychono.39.4>

三浦 茉莉・北島 正人 (2017). 乳幼児養育者の被援助志向性を踏まえた支援についての検討——養育者の対象関係に着目して—— 北海道心理学研究, 39, 87-87. https://doi.org/10.20654/hps.39.0_87

溝口 侑・溝上 慎一 (2020). 大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係——ロールモデル尺度 (RMS) の開発の試み—— 青年心理学研究, 32(1), 17-36. https://doi.org/10.20688/jpsyap.32.1_17

文部科学省 (2012). 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm (2022年9月30日)

永井 洋一 (2007). 少年スポーツ ダメな指導者バカな親 合同出版

日本労働組合総連合会 (2019). 男性の家事・育児参加に関する実態調査2019 Retrieved from <http://www.jtuc-rengo.or.jp/info/chousa/data/2019008.pdf?53> (2022年9月30日)

- 西嶋 真理子・松浦 仁美・星田 ゆかり (2015). 発達障害児の親を対象に保健師が行った前向き子育てプログラム (Positive Parenting Program—トリプルP) の評価——評価指標による介入効果の分析——日本地域看護学会誌, 18, 41-50. https://doi.org/10.20746/jachn.18.2-3Comb-No_41
- 大橋 恵・井梅 由美子・藤後 悦子 (2015). 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき——自由記述法による検討——東京未来大学研究紀要, 8, 27-37. https://doi.org/10.24603/TFU.8.0_27
- 大橋 恵・藤後 悦子・井梅 由美子 (2021). 小学生対象の地域スポーツにおける「気になる子」の実態——地域スポーツに子どもが参加している母親に対する調査より——早期発達支援研究, 4, 21-32.
- 大橋 優・谷向 みつえ・加藤 美朗 (2018). 学齢期発達障害児の母親の子育てストレス尺度の作成 日本心理学会第 82 回大会発表論文集, 816.
- 尾見 康博 (2019). 日本の部活 ちとセプレス
- おおたとしまさ (2019). ルポ教育虐待——毒親と追いつめられる子どもたち——ディスカヴァー・トゥエンティワン
- Safyer, P., Volling, B. L., Schultheiss, O. C., & Tolman, R. M. (2019). Adult attachment, implicit motives, and mothers' and fathers' parenting behaviors. *Motivation Science*, 5, 220-234. <https://doi.org/10.1037/mot0000112>
- 島沢 優子 (2017). 部活があぶない 講談社
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案——メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Strand, P.S. & Wahler, R. G. (1996). Predicting maladaptive parenting: Role of maternal object relations. *Journal of Clinical Child Psychology*, 25, 43-51. https://doi.org/10.1207/s15374424jccp2501_5
- 鈴木 翔 (2012). 教室内カースト 光文社
- 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵 (2017a). チームのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響モチベーション研究, 6, 17-28.
- 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵 (2017b). 過去の傷つき体験の想起と子育て期の対人関係——対象関係に焦点をあてて——コミュニティ心理学研究, 20 (2), 184-197. https://doi.org/10.32236/jscpjjournal.20.2_184
- 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵 (2020). バスケットボールをプレーする子どもたちの指導者, 親, チームの親集団 (応援席) への期待——持続可能な開発 (SDGs) と「子どもの権利とスポーツの原則」を実現するため——モチベーション研究, 9, 23-34.
- 藤後 悦子・三好 真人・井梅 由美子・大橋 恵・川田 裕次郎 (2018). 地域スポーツに関わる母親のネガティブな体験 心理学研究, 89 (3), 309-315. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.17302>
- 藤後 悦子・大橋 恵・井梅 由美子 (2021). 子どもの運動に対する養育態度尺度作成の試み 心理学研究, 92 (4), 267-277. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20205>
- 内山 登紀夫・宇野 洋太・蜂矢 百合子 (2018). 子ども・大人の発達障害診療ハンドブック——年代別にみる症例と発達障害データ集——中山書店
- Vinson, K.E. (2013). Hovering Too Close: The Ramifications of Helicopter Parenting in Higher Education. *Georgia State University Law Review*, 29, 423-452.

(受稿: 2022.10.4; 受理: 2022.12.19)